未来に生かせ歴史遺産

タイムス いきいきプラザ inなんじょう

【南城】佐敷、知念、玉城、大里の旧四町村合併による、南城市誕生を記念した「タイムスいきいきプラザinなんじょう」のまちづくりシンポジウム「健康づくりを中心とした観光振興」が十七日、市大里農村環境改善センターで開かれた。さびれた商店街だった大分県日田市豆田町を人気観光地に変えた中心の人、石丸邦夫さん（同市観光協会長）が「再生へのステップ」と題して基調講演。地域に誇りを持ち、情報発信することの大事さを語った。パネルディスカッションでは、新市活性化に向けて四人のパネリストが活発に意見交換。フロアを交えて、歴史遺産や精神文化など地域の財産を生かした観光振興の展望と課題を探った。主催は南城市、南城市教育委員会、沖縄タイムス社。

観光振興シンポジウム

パネリスト
- 石丸 邦夫氏 大分県日田市観光協会長
- 白石 武博氏 カヌチャベイリゾート社長
- 開 梨香氏 オフィスHIRAKI代表
- 古謝 景春氏 南城市長

コーディネーター 松鷹 彰弘氏 沖縄大学教授（レジャー・観光論）

「心の豊かさ」志向で 旧町村の資源活用へ

松鷹氏

松鷹彰弘氏　今回のテーマとなっている「健康を中心とした観光振興」にある「健康」は、WHO（世界保健機関）が定義する「身体、精神、社会、霊的に完全な一つの幸福の状態」を指す。バブル経済崩壊後、国民の志向は「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へ移り、観光でも本物の自然、本物の文化を求める幸福感が重視されている。

南城市は「神に一番近い地域」としての誇り、日々の暮らしで大切にする自然や先祖への畏敬、尊敬の念など、精神文化が根付いている。その自然や文化を素材として魅力をどう高めるか。行政、産業、市民の役割を見いだし、「地元主導」の観光振興を探りたい。

古謝景春氏　一九九六年ごろの旧知念村時代から、生き延びる策は観光と位置付け、取り組んできた。南部は豊富な資源があるが、活用しなかった。まずはハードよりソフト面を重視し、人づくりを優先してきた。

旧知念村は南部の一番奥。ここまで人が来れば、おのずと南部にも人が流れてくる。年々、観光客は伸びており、地域の地道な努力が成果を結んだ。南城市は久高島、斎場御嶽、佐敷、大里、玉城、知念の各グスクといった文化遺産があり、由緒ある地域。これをうまく活用することが大切だ。合併したことで四町村の連携、土地利用計画をすみ分けできる。資源を守り、特性を生かしながら発展させられる。

二〇〇五年度は医療費が総額六十九億円。一般市民一丸となって取り組むことが求められる。

市には聖地を巡る「東御廻（アガリウマーい）」がある。祈りは自然、祖先への畏敬、尊敬の念を表す行為。自然治癒力を高めることにもなる。久高島もあり、新たな観光として伝統文化、歴史、精神文化をうまく活用し、観光に生かす。市全体を観光地にしたい。地域とともに元気になるため、人づくりとそのネットワークを形成し、地域から観光協会をつくる盛り上がりも必要だ。

開梨香氏　十年前から地域資源を活用した地域主導型の観光に携わってきた。当時は、環境庁がエコツーリズムを推進し始めたころだ。やんばるの三村と西表がモデルだった。やんばるは遅れた地域と見なされていたが、観光客は喜んだ。私自身、地域に愛情がわき、観光客も喜ぶ。その好循環があった。

体験滞在型観光では、西表の白浜と星立で手伝いしてきた。宿泊施設は区が運営すると決まっていた。空き家を使い、ログハウスを造ることになっていた。しかし、違和感があり、住民に話し合ってもらった。「都会の人が喜ぶ」「行政が決めたら変えられない」との声はあった。しかし「木造に赤瓦でないと」との声が出てきた。施設に屋号を残し、地主も喜んだ。

昨年度から知念村で聖地めぐりのモニターツアーもやり、二〇〇六年度は市に拡大した形で実施する。体験交流センターに続いて、歴史、海洋体験施設ができる。施設をつくることから始めて。観光客が「また来たい」と思う直感は、大事だ。

体験交流に貢献性を 入域規制も誘客方法

開氏　白石氏

開 梨香氏

白石 武博氏

古謝 景春氏

松鷹 彰弘氏

古謝氏　市は体験滞在型交流促進事業を進めている。これからの拠点づくりとしての体験交流センターはどういった活用がなされるべきか。

また、観光関連などの具体的なノウハウを持つ人や企業を派遣する「地域再生マネジャー」事業を取り入れている。

大型ホテルではなく地域全体が宿泊施設として機能できるようにするには、市民と地域再生マネジャーとのかかわりが重要だと思うが、どう考えるか。

開氏　拠点となる体験交流センターには南城市全体をコーディネートする機能が求められ、母体となる組織が重要。公のお金で地域全体のためという目的でつくられているので、その施設を担う人たちは、地域や社会に貢献することに喜びとして感じられる人たちを募ってみてはどうか。

地域再生マネジャーと協力して、自分たちができる範囲で、自分たちも楽しみながらやれる状況をつくる。それをサポートする拠点として体験交流センターがあるというのが理想的。

古謝氏　大勢の人を呼ぶようになると、地域全体が壊れかねない。地域の魅力を分かって、そのことに対価を払ってくれる方を呼び寄せたいと考えている。また、南城市の価値を上げていくにはどうしたらいいか。

白石氏　「ここのエリアは一日百人以上入ったら、自然が壊れてしまいます。したがって百人までしか入ることができません」といったような正しい形でレギュレーション（規制）をかけ協力を求めていくと、知的で所得が高い人がやってくる。

それは、むしろ地域の価値を高めていくことになると思う。

大事なのは観光客の目的になることができるソフトがあるのか、ないのかということ。南部を訪れる人のほとんどは那覇に宿泊している。

南城市への問いかけになるが、お客さんの目線に立って市に引き込む魅力があるものに得ることができるか、どうか。

やり方はたくさんある。例えば、交通の問題を解決したり、地域の祭りなどを那覇に泊まる観光客に紹介できる仕組みをつくることができるか、どうかだ。那覇に泊まる人は、そういうのを待っている。沖縄に来る六割はリピーターで一般的な観光施設には飽きている。魅力ある南城市をどうやって見せていくかが鍵。

観光客は那覇市にたくさん泊まっており、いくらでも引き込むことはできる。

人材と魅力を探そう 「らしさ」を売り出せ

開氏　白石氏

白石武博氏　観光業は人を引っ張り込む産業。どうやって人を連れてくるか。とにかく人がいないことには何も始まらない。人の誘致は企業誘致と違い、エネルギーとアイデアがあればできる。

カヌチャベイリゾートで実施しているスターダストファンタジーは、十一月からの冬シーズンに「共生」と、南城市らしさを打ち出す「競争」の視点で、観光客が南城市をどう認識し、それをうけ方向性を見定めることが求められている。

人を引っ張り込むイベントだった。ミレニアム問題でコンピューターの誤作動が心配されたころで、マイナスをプラスに変えた。やってみるとその時期に合わせて県内外から多くの観光客が来てくれた。

観光を業として位置付けるなら数字の目標を立てるべきだ。入域者数の県統計はあるが、地域ごとの把握は大切。継続して調べ、実態を知り、一定の基準をつくるべきだ。

観光客は一、二回は来てくれるが、三回目はモノがよくないと来ない。良い話より悪い話はよく伝わるもの。良いものを提供する努力を怠ると宣伝してもだめ。結局、安くし、品質を下げ、人が来なくなる―と悪循環に陥る。

はっきり言って、南城市の範囲は分からない。市らしさとは何か。ブランド化をしていかないと恩納、読谷のようにエリアとして認識されない。南部の中の南城市という「共生」と、南城市らしさを打ち出す「競争」の視点で、観光客が南城市をどう認識し、それをうけ方向性を見定めることが求められている。

腹をくくり、このまちに生き、このまちを盛り上げよう。「百件の店が一日に、百人の客を呼び込む」思いが大切。住む人、来る人にとってもいまちにしよう。それが健康につながる。

石丸邦夫氏　南城市は元気があり、田園が残る牧歌的風景できれいな印象を受けた。今は古民家を生かすなど、どこも同じようなことをやっており、差別化が必要。

童謡や唱歌は昔の自然を歌いこんでいる。それがこれからのまちづくりにヒントを与えている。「春の小川」。もしこれが残っていれば、大きな財産になる。私たちにとって棚田は大きな財産だった。

「一日、一感動」を実践してほしい。星空のきれいさ、風景、史跡など、市民がまずまちを知ることから始めて。観光客が「また来たい」と思う直感は、大事だ。